

座屈の問題

弾性を持った棒を両端から押すと、棒は少しずつ変形していくが、ある荷重で急に変形の模様
 が変化し、大きなたわみを生ずる。このような現象を座屈という。座屈は数学的に解析されてい
 るが特異点論的見地からも見ようというのが本稿の趣旨である。無限次元だって特異点論の対象
 なのさというお話である。

■モデル 長さ ℓ の棒を垂直に立て、上端に質量 m の重りを載せる。棒の下端から長さ s の点
 P を $(u(s), h(s))$ と書き、点 P での棒の接線が垂直方向となす角を θ とすれば

$$(u'(s), h'(s)) = (\sin \theta, \cos \theta)$$

を得る。重りの高さは次の様に計算される。

$$h(\ell) = h(\ell) - h(0) = \int_0^\ell h'(s) ds = \int_0^\ell \cos \theta ds = \int_0^\ell \sqrt{1 - \sin^2 \theta} ds = \int_0^\ell \sqrt{1 - (u')^2} ds$$

よって重りの位置エネルギー P は g を重力加速度として次で与えられる。

$$P = mgh(\ell) = mg \int_0^\ell \sqrt{1 - (u')^2} ds$$

棒の曲率 κ は $\kappa = \frac{d\theta}{ds} = \frac{d}{ds} \sin^{-1} u' = \frac{u''}{\sqrt{1 - (u')^2}}$ なので、棒の歪エネルギー S は

$$S = \frac{1}{2} \int_0^\ell \kappa^2 ds = \frac{1}{2} \int_0^\ell \frac{(u'')^2}{1 - (u')^2} ds$$

で与えられ、全エネルギー E は次で与えられる。

$$E(u) = S + P = \frac{1}{2} \int_0^\ell \frac{(u'')^2}{1 - (u')^2} ds + mg \int_0^\ell \sqrt{1 - (u')^2} ds$$

■変分計算 $X = \{u \in L^2[0, \ell] : u'' \in L_2, u(0) = u(\ell) = 0\}$ と置き E を X の $u = 0$ のある近
 傍で定義されていると見て、これの変分を求めてみる。

$$\begin{aligned} & \frac{E(u + tv) - E(u)}{t} \\ &= \frac{1}{2} \int_0^\ell \left(\frac{(u'' + tv'')^2}{1 - (u' + tv')^2} - \frac{(u'')^2}{1 - (u')^2} \right) ds + mg \int_0^\ell (\sqrt{1 - (u' + tv')^2} - \sqrt{1 - (u')^2}) ds \\ &= \int_0^\ell \left(\frac{u'(u'')^2 v'}{1 - (u')^2} + \frac{u'' v''}{1 - (u')^2} + O(t) \right) ds - mg \int_0^\ell \left(\frac{u' v'}{\sqrt{1 - (u')^2}} + O(t) \right) ds \end{aligned}$$

なので、 $\lambda = mg$ と置いて、変分 $\delta E \in X^*$ が次で定まる。但し X^* は X の双対空間。

$$\Phi(u, \lambda)[v] = \delta E[v] = \int_0^\ell \left(\frac{u'(u'')^2 v'}{1 - (u')^2} + \frac{u'' v''}{1 - (u')^2} - \lambda \frac{u' v'}{\sqrt{1 - (u')^2}} \right) ds \quad (1)$$

■零点集合を調べる そこで

$$\Phi : X \times \mathbb{R} \longrightarrow X^*, \quad (u, \lambda) \mapsto [v \mapsto \Phi(u, \lambda)[v]]$$

と置いて、 $\Phi(u, \lambda) = 0$ で定義される集合を $u = 0$ の近傍で調べたい。 $u_n = \frac{1}{\sqrt{\ell/2}} \sin \frac{n\pi s}{\ell}$ として X は u_n 達の張るベクトル空間の閉包と見る。 X の元 u を $u = \sum_{n=1}^{\infty} x_n u_n$ と表すことにすれば、要は次の写像の零点集合を調べれば良い。

$$\widehat{\Phi} : \mathbb{R}^{\infty} \times \mathbb{R} \longrightarrow \mathbb{R}^{\infty}, \quad (x_1, x_2, \dots, \lambda) \mapsto (\Phi(u, \lambda)[u_1], \Phi(u, \lambda)[u_2], \dots)$$

(1) を用いて、計算すると

$$\Phi(u, \lambda)[v] = \int_0^{\ell} [(u''v'' - \lambda u'v') + (u''(u')^2v'' + u'(u'')^2v' - \frac{\lambda}{2}(u')^3v') + (u')^3O(u', u'')^2] ds \quad (2)$$

なので

$$\begin{aligned} \Phi_u(0, \lambda)[u] \cdot u_n &= \int_0^{\ell} (u''\phi'' - \lambda u'u'_n) ds = \int_0^{\ell} (u'' + \lambda u)u''_n ds \\ &= \sum_{m=1}^{\infty} x_m \int_0^{\ell} (u''_m + \lambda u_m)u''_n ds = \frac{n^2\pi^2}{l^2} \left(\lambda - \frac{n^2\pi^2}{l^2} \right) x_n \end{aligned}$$

を得る。 $c_n = \frac{n^2\pi^2}{l^2} \left(\lambda - \frac{n^2\pi^2}{l^2} \right)$ と置けば

$$\widehat{\Phi}(x_1, x_2, \dots, \lambda) = (c_1x_1 + O(x_i^2), c_2x_2 + O(x_i^2), \dots)$$

なので、 $\lambda \neq \frac{n^2\pi^2}{l^2}$ ならば（逆写像定理より） $u = 0$ の近傍では $u = 0$ のみが解である。

■解の分岐 $\lambda = \frac{n^2\pi^2}{l^2}$ なる点では、自明解 $u = 0$ から分岐する解が現れる。例えば $\lambda = n^2\pi^2/l^2$ のとき、 $c_n = 0$ で

$$\Phi(u, \lambda)[u_n] = -\frac{n^2\pi^2}{l^2} \left(\lambda - \frac{n^2\pi^2}{l^2} \right) x_n + \frac{n^6\pi^6}{4l^7} x_n^3 + \dots$$

と書ける。この計算は微分計算を用いたテイラーの展開の係数決めの議論である。テイラー展開の係数を見て零点集合の様子を解析しようというのは（有限次元での）特異点論的アイデアである。今の場合は無次元であるが同様の解析が可能で $\lambda > \frac{n^2\pi^2}{l^2}$ のとき $x_n = \pm \frac{2l^{5/2}}{n^2\pi^2} \sqrt{\lambda - \frac{n^2\pi^2}{l^2}} + \dots$ を満たす解が存在する事がわかる。なお、この部分は議論が雑で、正確にはリアプノフ=シュミット還元という方法を使う。

レポート課題（1は必須、2と3は任意）

1. (1) を用いて (2) を導け。
2. 上の議論で用いた逆写像定理を述べよ。
3. リヤプノフ=シュミット還元とは何かを調べてまとめ、上の説明を合理化せよ。